

1 1 【かにくいおんな】

【かにくいおんな】のことは、懐爺からきいたことがありました。べつだん、人間に害を加えるおばけでもないから、そのころはすっかりわすれていました。

しかしかんがえてみると、【かにくいおんな】がおばけではなくて、女を蟹のおばけにしてしまう、蟹のほうがおばけなのかもしれない。

ある日、村の祭りがあって、いつまでもにぎやかさが消えない夜。

村祭りは、こどもの天国でした。

夕方になると、家に帰れ、夜になると、早く寝ろ、といわれつづけているこどもたちも、村祭りの日だけは、夕方でも夜でも真夜中でも何もいわれないのですから。

真夜中近くになって、村長の屋敷でごちそうがでるといので、ぼくもいきました。

母親が下痢（げり）をしていたので、ぼく一人でいきました。

村長の屋敷の大広間に、いくつも食卓が並べられ、卓上にはごちそうが並べられています。

この日は、老若男女誰でも平等に、金持ちも貧乏人も区別なく、長がつく人も平の人も関係なく、勝手に食卓につき、勝手にたべることができます。

鰻、天ぷら、寿司、刺身、煮魚、焼き魚、野菜の煮物、季節の果物、あれもこれも並んだ中で、毎年の人気は蟹でした。

蟹といっても、この村では、ずわい蟹やわたり蟹など、立派な蟹はとれないから、沢蟹です。

沢蟹をまるごと油で揚げたやつが、どの食卓でも器に大盛りになっています。

じつはぼくも、この沢蟹がおめあてでした。

誰もがお客さんだから、遠慮（えんりょ）はいらないのでした。

ところがこの日は、大変な客がいました。

こどものぼくがみても、お年ごろの美女で、たしか今年、町から引越してきた、英語の教師の娘さんでした。

英語の教師は、外国人でその奥さんは日本人だから、十七、八の娘さ

んは、混血児（こんけつじ）でした。

あまりにきれいな淑女（しゅくじょ）なので、誰だってそばに近寄りがたい。

それをいいことに、娘さんは卓上の沢蟹を、次々と口に放り込んでいきます。

まだ口の中にいっぱいあるのに、もう口に入れる。

すごいおいおいで、卓上の蟹を平らげると、ほかの食卓に移って、また蟹をたべはじめる。

そのいきおいのすごいこと、村長の愛犬だって、かないません。

蟹が残ったら、村長の愛犬のものになるのだけれども、このぶんでは今年も、愛犬も蟹にありつけそうにない。

ほかの者が蟹に手をつけようと、箸（はし）を突きだすと、娘さんはその箸を真っ二つに、折ってしまう。

それで、愛くるしい笑顔でほほえまれては、誰も文句はつけられない。

娘さんは、そのうち自分の箸も真っ二つにして、素手（すで）で蟹をつかみはじめます。

その有様（ありさま）をぼくがどうみていたのか、いまでもよくおもいだせない。

あの娘さんは、たぶん手品かなんかやっていて、蟹は本当はあの大きな胸のふくらみの、どこかに隠されているのではないか。

そんなことをかんじたのだけは、おぼえています。

とにかく、食卓上の蟹という蟹は、ぜんぶなくなり、娘さんは何とかとつぶやいて、となりの部屋にいきました。

何といったのだったか、それもはっきりしないけれども、

「もっと蟹を」

だったか、

「蟹はもうないの」

だったか。

だからもしかすると、となりにいったのは、蟹を探しにいったのかもしれないのです。

たぶんぼくは、そう察したのでしょう、少し間を置いて、ぼくも蟹のおこぼれに、あずかれるかもしれないと、となりをのぞいてみたのでし

た。

そこに、娘さんはいない。

そこには、消防自動車くらいの、巨大な赤い蟹がいて、巨大な鋏（はさみ）を器用につかい、ものすごい形相（ぎょうそう）で、沢蟹をたべているのでした。

【かにくいおんな】だ。

ぼくは頭の中だけでさけび、腰をぬかし、それでもはってにげました。

【かにくいおんな】はもちろん、ぼくを追いかけてはきませんでした。

幸運にもぼくは、蟹ではなかったから。